

触ること

神谷 勝広

(大学文学部教授)



百見は一触に如かず

研究・授業において、心がけていることは、「百聞は一見に如かず、されど百見も一触に如かず」です。

私の研究

私は、江戸時代の小説を研究対象にしています。

ところが、困ったことに、江戸時代の小説について、他人に説明されても、私はさっぱり理解できません。たぶん百回聞いても無理な気がします。そこで、結局、自分でじっくり見て、熟読しています。加えて、さらに厄介なことに、江戸時代の小説は、活字や写真で見ても、気持ちが高揚してきません。なかなか頭に入ってきませんし、腑にも落ちません。

江戸時代の小説ならば、やはり江戸時代に刷られた実物を直にページをめくり、江戸時代の人と同じ動作でゆっくり読むべきなのです。江戸時代の小説は、ありがたいことにずいぶん現存しています。古書店を通じて、高価ですが、まあ

無理をすれば購入もできます(もつとも家族との軋轢は避けられませんが)。つまり、嬉しいことに、江戸時代の小説は、

江戸時代の人とまったく同じ目線で読むことが可能なのです。その状態であれば、気持ちも高揚し、感覚が鋭敏になり、いろいろ面白い論文のネタを思い浮かべます。

私の授業

授業においても、「百聞は一見に如かず、されど百見も一触に如かず」という姿勢を取っています。

一方的な講義はしません。教員が一方的に百回話をしても効果的ではない気がします。学生には、自分でじっくり読み込んでもらうようにしています。「百聞」より「一見」の方が本人の納得が得られます。しかし、私は、もう一步踏み込んでみたいと考えています。たとえば、井原西鶴の小説(お金の話がよく出てくる『世間胸算用』)の話をし、その上で、興味深い部分を紹介して、熟読してもらいます。それを読んでもらっている最中に、

本物の小判(前任校を辞めるとき、退職金が出ましたので、女房の前で一週間欲しい欲しいと言っておりましたら、うるさいからさつさと買いなさいと叱られて買いました)を廻します。そして、小判を掌の上で、お手玉みたいにして遊んでみなさいと学生に勧めます。小説の中に、小判が出てきても、読んでいるだけでは心に沁みません。小判に触れながらであれば、その小説のその部分を一生覚えていてくれるように思います。

懺悔

江戸時代の小説は、当然ながら、現代の字体で書かれています。残念ですが、現代の字体に直したものの(翻刻)で、授業では読んでもらっています。しかし、江戸時代の小説は、挿絵が入っていて奇麗なものも少なくありません。ですから、江戸時代に刊行された実物を持って行き、それを見てもらうこともします。

そうやって、興味を高めたところを見計らい、「あのミミズの這ったような字もね、読めると楽しいよ。やってみない」

あるいは、「江戸時代は手付かずの研究分野が多いから、いいよ」などと、騙すようにして誘い込みます。

このような行為は、詐欺師のそれに似ています。懺悔しつつ、学問のためならば、きつと神様もお許しになれるだろうと勝手に思っています。神様への冒瀆でしょうか。

悩み

最近、学生たち(特にゼミ生)が、理由もなく、私の研究室に来ます。

研究室に置いてある浄瑠璃人形をカタカタと振り回したり、江戸時代の実物の小説を広げて「やつぱり読めない」と文句を言いながら、挿絵を見てばらばらページを繰っています。浮世絵も何枚かは置いてあるので、「何色刷りかなあ」などと呟きながら眺めています。

どうも、私の研究室を遊び場と間違えている気も時々あります。まあ騙すようにして、江戸時代の文芸に引き込んだ私も悪いと思っておりますので、我慢をしています。

時々、私が論文を書いている最中に、「これなんですか、あれなんですか」としつこく聞くので、「ええい、うるさい、静かに」と叱りますが、まったく彼らは意に介していない様子です。

卒業論文

学生たち(特にゼミ生)とは、そんな関係です。しかしながら、唯一、卒業論文に関してだけは例外的ようです。

ゼミ生が、「卒業論文の相談の時は、先生は顔つきからして違う」とか「卒業論文という言葉に反応して、先生は人相が変わるから、そうならたら気を付ける」とか「冗談半分に笑いながら卒業論文のことを話題にはするな、先生が大魔人と化す」とか、いろいろ囁き合っているようです。確かに、卒業論文は重視しています。しかし、私の人格や容貌が変化することはないと、本人は思っているのですが、まあそういう傾向は完全に否定できないかもしれません。「卒業論文は、大学生生活の華だ」とよく叫んでいます(かみや かつひろ)。

「計量経済史」で考える アメリカの経済格差

角井 正幸

(大学経済学部助教授)



私が授業を担当するようになって、ようやく3年が過ぎようとしています。その間に担当した講義は、「アメリカ経済」「統計」「農業経済」「経済の歴史と思想(経済史)」の4科目となりました。一見(経済史)の4科目となりました。一見何の脈絡もないこれらの科目を担当することになったのは、「アメリカの農業発展史を『計量経済史』という手法を用いて分析する」という私の研究が背景になっています。もう少し詳しく述べると、研究の対象としている地域はアメリカ合衆国(とくに中西部)、分野は農業、時期は19世紀後半、そして、分析手法が統計学を用いた数量分析となっているわけです。

ここで、「計量経済史」という言葉は耳慣れないものではないかと思うので、少しだけ説明しておきましょう。計量経済史は、1950年代後半に誕生した比較的新しい経済史分析の手法で、その頃には「新しい経済史」と呼ばれていました。その新しさは、経済史分析において市場の役割を重視し、数量データを精緻に扱うことによって、経済史における通説を再検討・批判していくところにあり

ました。その結果、計量経済史は「経済史の革命」や「経済史の再生」と呼ばれるようになるほどではやされ、アメリカにおける経済史研究を席巻するようになりました。現在では、アメリカにおける経済史研究のほとんどが計量経済史によって行われているといわれています。

もちろん、計量経済史に対しては数多くの批判もなされています。例えば、コンピュータに頼ってしか研究ができないであるとか、数値のみによって歴史を表すために非人間的であるという批判が多く取り上げられています。また、計量経済史では、「もし、その歴史的な事実がなければ」という仮説を立てた上で分析を行うことが少なからずあるのですが、このような「反事実的仮説」を設定すること自体が、歴史的事実を扱うべき経済史研究においてふさわしくないとする批判も聞こえてきます。これらの批判が当を得ていないわけではないのですが、誕生から50年近く経過した計量経済史は、その内部からも変革し、現在では、現代の経済問題を理解するために経済史の実情や過程を明らかにすることを目的とす

る分析が主流となっています。

最近では、何かにつけてアメリカの動向が注目されています。それはおそらく、冷戦後の世界においてアメリカが唯一の超大国となり、単独行動主義という突出した行動を採っていることに起因しているのでしょう。また、1990年代にニューエコノミーと呼ばれた好況を経験したことによって、アメリカが自信を深めたことが関係しているのかもしれない。その反面、先般の大統領選挙において、アメリカが分断されていると報道されたことが記憶に新しいのではないかと思います。アメリカ社会の分断には様々な要因があり、単純に議論することは慎まなければなりません。伝統的に経済格差が大きなアメリカにおいて、格差の解消という国内問題を解決する術を見いだせていないことが一因としてあるのではないかと思います。

そこで、アメリカにおける経済格差を歴史的に検討することは、研究対象として非常に興味深いといえます。19世紀のアメリカの特徴として、広大な領土を開拓する人たちが西部へと移動したことが

あげられます。このような西漸運動を支える制度として、より多くの人により安く土地を分配するための公有地分配法が整備されました。公有地分配法が機能していれば、アメリカの農村社会は平等性の高いものになったと考えられます。

では、実際にアメリカではどのような経済格差が存在したのでしょうか。この点を明らかにすることが、現在私を取り組んでいる研究課題です。比較的多くの人が公有地分配法の恩恵に預かった北部の農村で、想像以上に多くの小作農が存在したことが知られています。小作農は土地を所有していない農民ですから、土地を所有している自作などよりも下位に位置する存在と思われがちです。しかし、実際の一農家の平均経営耕地面積は、土地を所有していない小作農であっても、土地を所有している農民と遜色がないう計測結果を得ました。また、小作農が経営する農場では、自らの土地を耕作するわけではないので生産性が劣るといわれています。しかし、少なくとも主要農産物の生産において、当時の小作農の

生産性が自作農や自小作農と比較しても劣っているわけではないという点も明らかにしました。

その反面、当時のアメリカの農村には、一部の土地を貸し出すことができるほど大規模な土地を所有している半地主、自ら経営する農場を所有している自作農、一部の土地を借り入れているが残りの土地を所有している自小作農、そして土地を所有していない小作農という各種の経営形態が存在し、それぞれが所有している不動産額(資産)の大きさには明確な差が存在していることも事実です。

このように、19世紀後半のアメリカでは、均質的な「経営」を行う農場が存在していた反面、土地や資産の「所有」に関して格差が存在しているという構造を有していたことが明らかとなりました。今後は、均質的な農場経営をもたらした土地賃借市場の分析や、小作農や自作農内部での格差の実情を明らかにすることを研究の主眼としていきたいと考えています。

(ついでに まよぶゆき)

「マイ現代こども学」から 同女らしい 「現代こども学」の構築へ

左巻 健男

(女子大学現代社会学部教授)



学校現場から大学へ

私の専門は理科教育と環境教育である。それがどんな幅を持つているかは、最近引き受けた講演の対象と内容からイメージしてもらえらると思う。小学生や高校生対象の理科や実験・ものづくりの授業、小学校・中学校・高校教員対象の理科教育の話や実験指導、FD関連で大学教員対象の話、塾など民間教育の指導者対象の話、水道局関係者など対象の水環境の話。また、単著・編著には、小学校・中学校・高校の理科教育、市民レベルの理科教育・科学啓発、学校での環境教育や市民レベルの水環境問題などの単行本がある。長く東京大学教育学部附属中・高等学校教諭をしながら理科教育から環境教育へと手を広げてきた結果である。

しかし、理科教育では、いわゆるアカデミズムのあり方に疑問があり、学会での論文発表や学会活動にはほとんど関わってこなかった。学校現場からこどもたちと格闘して得られた理科教育・理科授業の知見を発信できればいいと思っていた。

それが少し気が変わって4年前に京都

工芸繊維大学教授に採用されて、京都の大学へと移ってきた。そしてさらに同志社女子大学教授へと移ってきたのは、「現代こども学」という魅力的な名称の学科で専門を活かしたい、さらに新しい専門の領域を拓きたいという思いからだった。工織も同女もアカデミズムでの研究業績よりは私の活動を評価してくれただと思う。これからのアカデミズムは書いた人しか読まないような論文を書くことよりは現代の諸課題にチャレンジするような研究に向かわなくてはならないのではないか。

一緒に「現代こども学」を創ろう

国立の教員養成系などから一緒に採用された同僚たちは「アカデミズムで教育学の論文を書きましたよ」というタイプではなく、皆アクティブで、この新しい学科を学生にとっても自分たちにとっても「おもしろいわくわくしたものにしよう」という意欲に満ちているのが嬉しい。新学科であり、同志社では初めての小学校教員免許が取得できるということもあり、生じてきた課題群についてさまざまなワーキンググループをつくっては構想し合い、具体的なプランを創って

いる。

さらに学部がまさしくリベラル・アーツのねらいにもっとも合致したものだ。リベラル・アーツは、学生をして、自由人としての主体的、かつ統合的な人格形成を促し、幅広い教養、知識、判断力を備えた、実行力に富む人間を育てることを目的にしている。だから現代社会学部に現代こども学科が置かれているのも期待がもてる。学生たちには、幅広い教養、グローバルな視野をもって小学校教員やこども関連の仕事に進んでもらいたいと思う。その過程で、常に人間とは何かを問い続けることが大切になろう。精神的、社会的、自然的存在としての人間を対象にするとき、どれも不可欠な人間の重要な側面として考えなければならぬ。そこで「人間」を「こども」に置き換えればそれはそのまま「現代こども学」を探究することになるだろう。学科ではよく「マイこども学を創ろう」ということが言われるが、各自の「マイこども学」を交流しながら完成年度の3年後までに同女の「現代こども学」はこんな特徴がある、などということが言えるようにしたいものだ。

学科の学生の就職については小学校教

員がもつとも希望が多い。幸いここ10年ほどは小学校現場で層が厚い50代教員の退職が相次ぎ、小学校教員の需要は大きい。私の「基礎演習」のクラスでは学生たちに学科を卒業してから想定できるキャリアについて調べさせているが、今や、小学校教員採用試験の倍率は都会では3倍という低倍率になっている。今後はさらに低くなるだろう。

小学校教員になるにせよ他の仕事にくにせよ、アクティブでおもしろい人間を育てたいと思う。

最近の私の取り組み

― 検定外理科教科書づくり

私がここ2年ほどとくに取り組んでいた活動が検定外中学校理科教科書、検定外小学校理科教科書づくりである。私は検定中学校理科教科書の執筆者をしているが、その過程で現在の学習指導要領と教科書検定があまりにもひどいことに對して、単なる批判ではなく、具体的に小学校や中学校ではこんな内容をこんな展開で、という実際に教科書や副教材に使えるレベルのものを創って世に問いたいと思った。義務教育段階での科学リテラシーの具体的提案である。

中学校版(『新しい科学の教科書』「1」3の3巻 文一総合出版)は約200人で、小学校版(『新しい理科の教科書』「3」6年の4巻 文一総合出版)は約80人で執筆・検討・編集して出版した。2004年春に出した中学校版は、増刷を繰り返して実売計12万部以上になり、2004年には第2版になった。

私は、この中学校版と小学校版の呼びかけ代表であり、執筆代表である。このシリーズで、「昔はたくさんの内容を学んだから昔に戻ろう」という主張をしたのではない。先進諸国最低の授業時間数と内容へも批判はあるが一番言いたいのは理科教育の質的なアップである。自然界を見るための科学の目を育てる、実生活で学んだことを活用できる力を身につけさせることができる内容、展開を世に示したかった。こどもの好奇心を刺激し、動機付けをして、自分で学んでいくことができる教科書を目指したのである。

次期の学習指導要領の改訂や検定理科教科書の改善へと少しでも影響を与え、わが国の理科教育の改善の一步になればと思っている。

(さまき たけお)

高校生と哲学を学ぶ

大塚 賢司

(高等学校教諭)



高校教育での哲学、倫理の位置

高校の3年間は、生徒が急激に大人になっていく時期である。この大人になるということの中には、物の見方・考え方もひとり立ちするということが重要な部分として含まれている。高校生が、時には背伸びをしながら授業で哲学、倫理的素養を身につける機会があるのは貴重なことだと思う。

現在の高等学校の学習指導要領には、公民科という教科がある。その公民科の中には、2単位(単位時間50分、週2回の授業)で「現代社会」「政治経済」となる。「倫理」という珍しい科目がある。元来は「社会科」として一体だったものが、1992年度の改訂により「地歴科」(地理、世界史、日本史分野)と「公民科」に分割された。また2003年度より、学校5日制への移行に伴う総学習量削減のあおりで、「現代社会」は、それまでの4単位から2単位へと学習量が半減した。4単位時代の教科書は、

高校社会科の入門科目でありかつ政治経済・倫理分野が幅広く盛り込まれていたが、2単位のそれは全体に貧弱であり、特に倫理分野はほとんど掲載されていない。

現行の学習指導要領では、公民科の中から「現代社会」もしくは「倫理」「政治経済」のいずれかを学ぶという必修科目指定がある。しかし、大部分の高校では、大学で哲学・倫理学を専門に学んだ教員がいなかったため、内容貧弱な「現代社会」2単位で公民科を済ませているところが多い。

こうしたことは意外と知られていない。近年は高大連携が盛んだが、人文科学や社会科学系の学部への進学者のほとんどが、かつては多くの者が高校時代に学んだ「倫社」(倫理社会の略称)の内容を全く知らずに大学へ進学している。彼らはソクラテスやテアルトなど名前すら全く知らない者がほとんどなのである。大学の授業で直ちに支障が出る理系科目や、企業から目に見える形での要請がある英語の場合は、高校側との教育的

接続が現実的問題となるが、哲学的素養の欠落は今のところ問題として意識すらされていない。

「バランスのとれた能力」軽視の中で

哲学的素養などなくとも、実学的分野では問題にならず、哲学専攻に進んだ学生ですら大学でゼロから学べば支障ないということなのだろうか。また、こうした事情は人文的素養や、理系の教科を幅広く学ぶことで培われる、バランスのとれた能力が高校の教育課程の中で追求されなくなってきたことの一例ではないか。また大学でもこうした傾向が顕著であるという指摘が、主たる生活を大学の外に身を置きジャーナリストとして客観的に大学教育を観察してきた立花隆によつて指摘されている(『東大講義 脳を鍛える』、特に第7回の部分に詳しい)。真の意味でのリベラルアーツが育つ場が今の日本にはたして存在するのか?問題の根は深いと言わねばならない。

同志社の建学の精神でもある「知育、

徳育、体育」のバランスのある能力を持つ人物の育成とは逆行する方向に、日本社会全体の趨勢と教育政策が向かいつつある。これは憂うべきことだと感じる。

同志社高等学校の倫理の授業

さて現在、同志社高等学校では2年生に必修科目の「倫理」が2単位(文部科学省公認の科目)と、3年生の自由選択科目群(8単位の枠がある)の中に「現代思想特論」が置かれている。いずれも、教科書を順番に解説するのを避け、1学期ごとに一つのテーマで焦点をしばつた授業を私は行っている。

とはいえ2年生の段階では、生徒は生まれて初めて学ぶ科目なので、1学期は異文化理解を入り口として「自分と異なる存在との関わり方を考える」、2学期は「近代社会のもたらした時間意識」の由来を探る、3学期は社会契約説を素材として社会的存在としての人間を考えるとこのテーマを設定している。これらのテーマには様々な思想家を素材として活

用している。結果的には教科書の3分の2程度はカバーしている。

また3年生の選択科目は、指導要領に存在しない、学校独自の科目であり教科書がない。ここでは現代的な素材でテーマ性をさらに強め、「なぜ人を殺してはいけないのか?」、宮台真司の「人生に生きる意味無し」説をどう考えるか、などのテーマで1学期ごとに考えさせていく授業を行っている。テレビ番組、新聞記事や話題の本、生徒自身が様々に形で書いたものなどをテキストとしていくわけで、私の1日は毎朝、新聞を読み授業のネタ探しすることで始まる(なおこの3年生の選択科目「現代思想特論」の詳しい実践報告は、1997年に『オウム真理教事件を哲学する』と題して地歴社から出版し、同志社時報でも紹介させていただいたことがある)。

全国的標準を満たしながら、私学としての同志社のオリジナリティ、教員の個性を發揮できる科目、授業が設定されていることに、私は誇りを感じている。

(おおつか けんじ)

「GRAPES」を使って

園田 毅

(中学校数学科教諭)



関数は中学生の難関

比例・1次関数は、中学生が初めて学ぶ関数です。関数の概念をつかむのに一苦労、そして1次関数を「直線の式」として理解するのに、また大きなハードルがあることを感じながら指導してきます。

今回、このハードルを「低く」し、かつ生徒たちの理解を深める工夫のひとつとして、関数グラフソフト「GRAPES」を使ってみました。このソフトは、大阪教育大学附属池田高校友田勝久氏が教育用に開発されたフリーソフトウェアで、誰でもインターネットより簡単にダウンロードし、自由に使用することができます。

(<http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~tomodak/grapes/>)

以下に、授業内容を紹介します。

「関数式」と「グラフ」をビジュアルに直結

本校では、今年度より図書室で1クラス(40〜41人)が1人1台のパソコンを

一斉に利用することができるようになりました。また、各自の作成したものをプリントアウトすることもできるようになりました。「GRAPES」は、図書情報部に、事前に全てのパソコンにインストールしていただきました。

授業では、まず教員が準備したファイル「 $y=2x+a$ 」($y=2x, 2x+1, 2x+2, 2x+3, 2x+4$)を開いて、平行な5本の直線グラフが切片 a の違いで上下にずれている様子を見ます。生徒たちは、切片の意味を視覚的に確認することができます。私からは、パワーポイントと黒板で、「関数式」の係数、定数と、「グラフ」の傾き、切片の関係を説明しました。



▲パワーポイントと黒板で説明

同様に、 (y) 切片は等しく、傾きの違う4本の直線グラフ「 $y=ax+2$ 」

$$\left(y = \frac{1}{2}x+2, y=2x+2, y = -\frac{1}{2}x+2, y = -2x+2 \right)$$

を見て、傾きの意味を確認します。また、全ての直線が「ある1点」 $(0, 2)$ を通りますが、「ある1点」は、 (y) 切片によって決定することを、生徒に発問しながら確認していきます。



▲グラフ作成中①

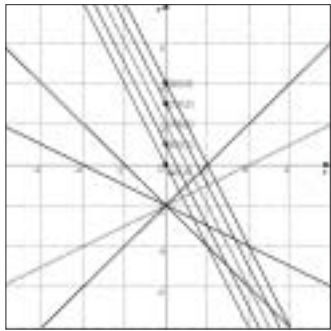
その後、いくつかの例題で使い方をマスターした後、「傾きは等しく、切片の違う直線グラフ $y = -2x + \triangle$ 」「切片は等しく、傾きの違う直線 $y = \bigcirc x + 1$ 」

を複数本ずつ作成したものを提出させました。



▲グラフ作成中②

早く終えた生徒は、「 $y = x^2$ 」、「 $y = \sqrt{x}$ 」などの機能を使って、いろんなグラフを書いて楽しんでいました。



▲生徒作品例

グラフソフトは有効な学習方法

生徒からは、「パソコンを使ってやると、関数もすこく楽しかった」「これなら『グラフを書きなさい』という問題の答えあわせもできる！便利！おもしろい！」「操作が難しかったけれど、けっこううまくできてうれしかったです」「パソコンの画面にグラフがパツと出るのがすごかった。陽関数と陰関数とかあるのかなと思った」という感想もあり、夏休みの自由研究で「GRAPES」にとりくんだ生徒もいました。

普段の授業では、 x, y 座標に点をプロットしてグラフを書かせながら、傾きと切片の意味を確認しています。

このように「関数式」を入力すればすぐ「グラフ」が出現する体験は、「関数式」と「グラフ」が直接結びつくものであり、有効な学習方法のひとつだと思います。

(そのだ つよし)